

講師講演資料

**平成21年度都道府県・政令指定都市
犯罪被害者等施策主管課室長会議**

あらためて自戒したい



「刺されて運びまは、九月に東京・池袋で起きた通り魔による無差別殺傷事件で長女を亡くした。娘が苦悶と、昏睡婦は「エレーターは三三の人がいます。階から上がりまじよう」と言った。動転して病院に駆けつけた二人が、「車を報道する側」の存在を初めて意識したのほ、このときだった。

宮園健世さん(左)とせつさん(右)の夫婦した。夜に再び、妻が果て帰ってしまった。長女の真跡さんは、その日の夕方死した。取材が追いつきかた。

そのした心と体への打撃に、アヌナイきに押し寄せて、夫婦をいじめた。驚きと悲しみ。事件を起した男への憎悪。深い喪失感。彼女が思いがけい階から上がりまじよう」と言った。

は、真跡さんが近くに借っていたアパートへ向かった。そこには十人ほどの報道関係者が待っていた。

「警察員に対するお気持ちには、アヌナイの呼び鈴が何度か鳴った。

神楽をいれたせき取材が、何日も続いた。機材や態度の者もいた。物腰はいいけど、聞きたいことだけを聞くときと息を吸った。その日の朝まで娘が遺棄に懸かっていた部屋で、父と母は泣いた。

事件の翌日こそ、宮園健世さんは、生難免れることができないという。

司法解剖を終えた遺体が、夜になつて帰ってきた。ところが、手廻りがあつてひきか用意されなかった。遺体はゆかを替るられただけの姿で車に棄せられた。宮園さんは助手席で付き添った。

娘さんがアパートの角を曲がったとき、穴に憤りと悔しさをこぼして噴き出す。

宮園さんは言う。「犯人はびんぐ憎い。でも憎悪の何分の一かはアヌナイに対するものです。事件に巻き込まれるのは、取材に巻き込まれることを意味してしました。悲しみに耐えるのに精いっぱい、の遺族のとき、これだけわかっていていなくていいか」

このした言葉をより真しに受け止めないかき、「報道の自由」や「知る権利」はいずれ嫌いを失いかねない。そのことをあらためて自戒したいと思う。

は、真跡さんが近くに借っていたアパートへ向かった。そこには十人ほどの報道関係者が待っていた。

「警察員に対するお気持ちには、アヌナイの呼び鈴が何度か鳴った。

神楽をいれたせき取材が、何日も続いた。機材や態度の者もいた。物腰はいいけど、聞きたいことだけを聞くときと息を吸った。その日の朝まで娘が遺棄に懸かっていた部屋で、父と母は泣いた。

事件の翌日こそ、宮園健世さんは、生難免れることができないという。

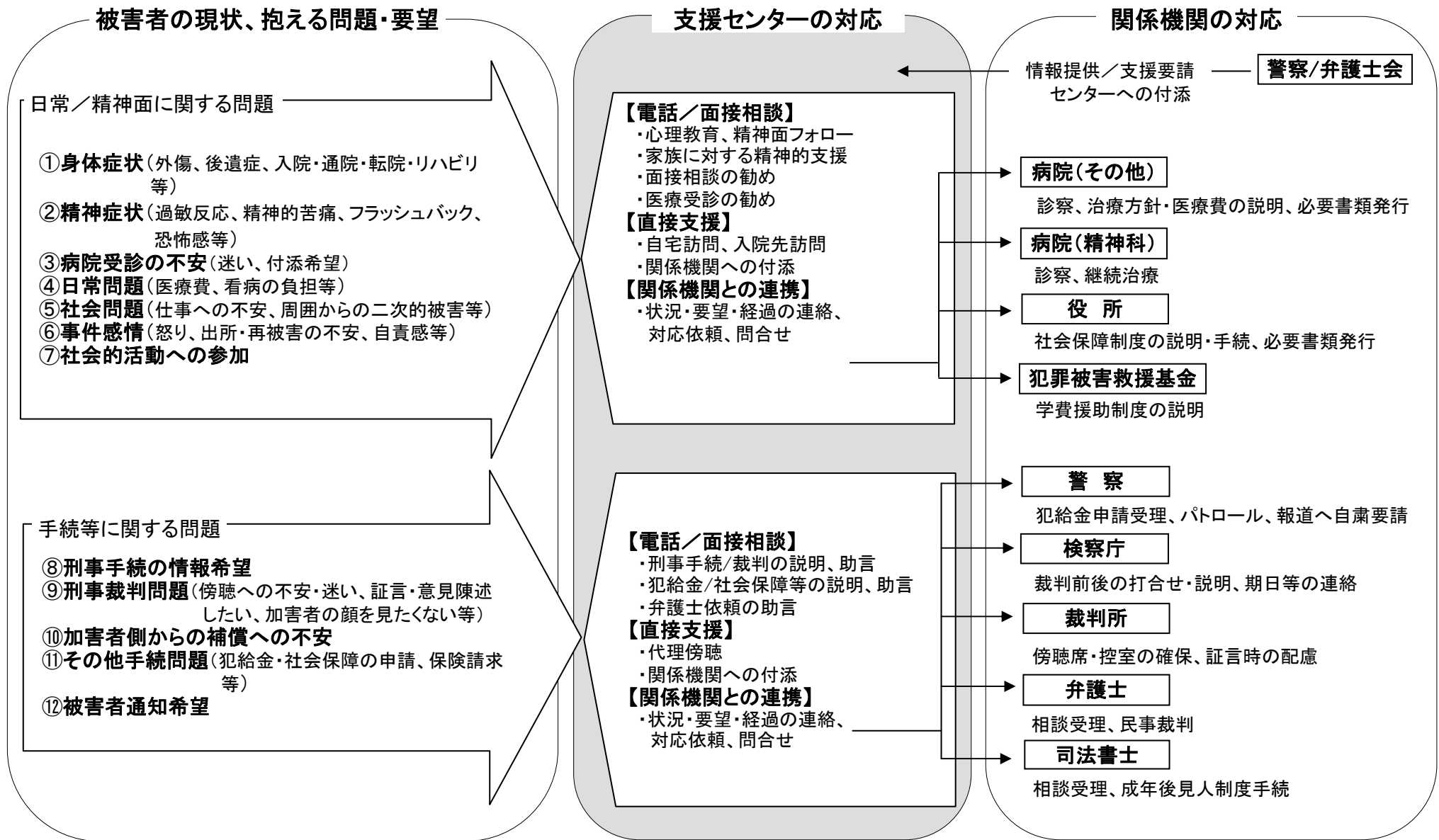
司法解剖を終えた遺体が、夜になつて帰ってきた。ところが、手廻りがあつてひきか用意されなかった。遺体はゆかを替るられただけの姿で車に棄せられた。宮園さんは助手席で付き添った。

娘さんがアパートの角を曲がったとき、穴に憤りと悔しさをこぼして噴き出す。

宮園さんは言う。「犯人はびんぐ憎い。でも憎悪の何分の一かはアヌナイに対するものです。事件に巻き込まれるのは、取材に巻き込まれることを意味してしました。悲しみに耐えるのに精いっぱい、の遺族のとき、これだけわかっていていなくていいか」

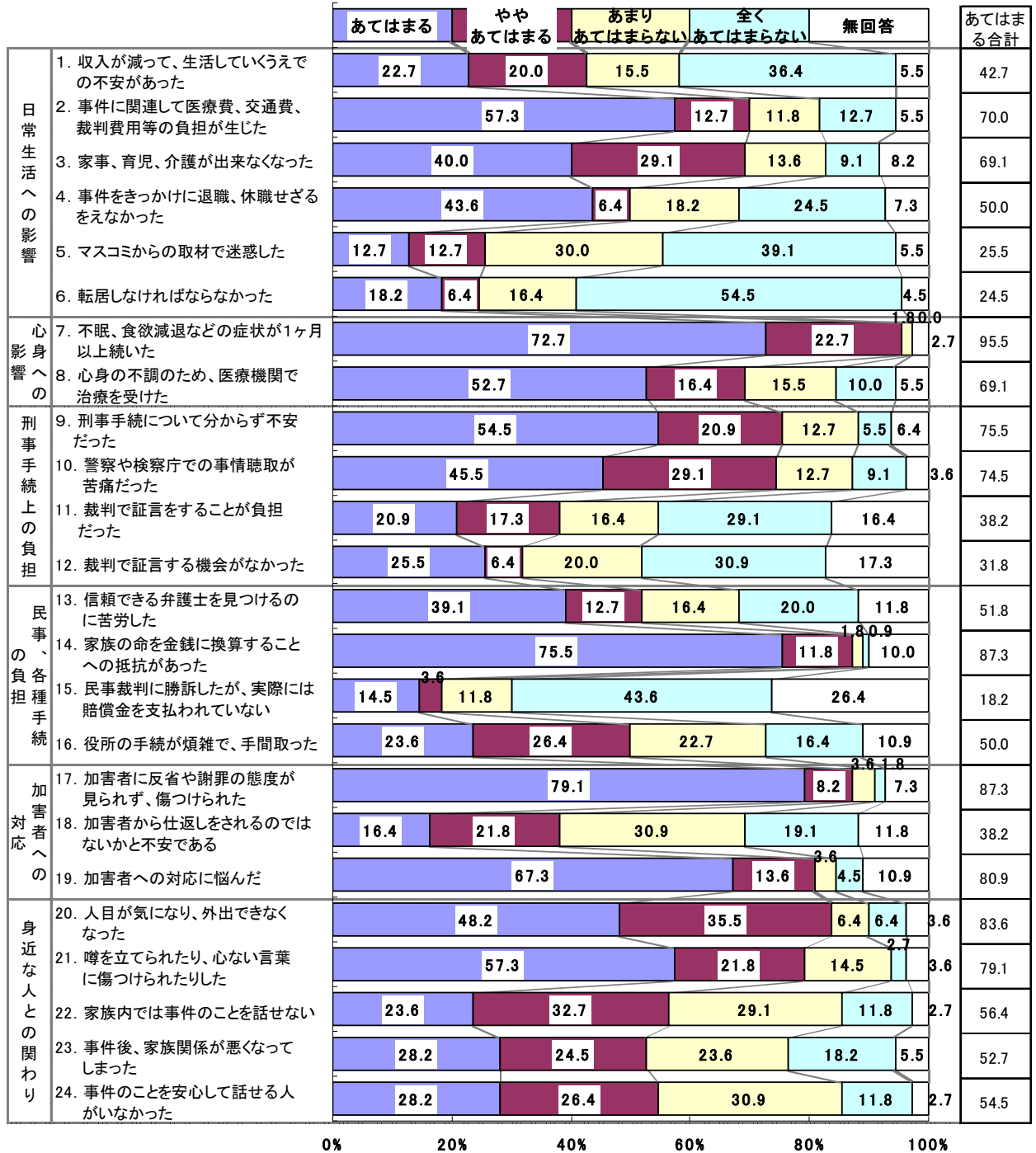
このした言葉をより真しに受け止めないかき、「報道の自由」や「知る権利」はいずれ嫌いを失いかねない。そのことをあらためて自戒したいと思う。

* 主問題と支援の経過図（強盗・暴行傷害被害者）



・被害後に悩まされた問題

「被害にあった後、どのような問題に悩まされましたか」という設問であげられた 24 項目に対して「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 4 段階で回答を求めた。



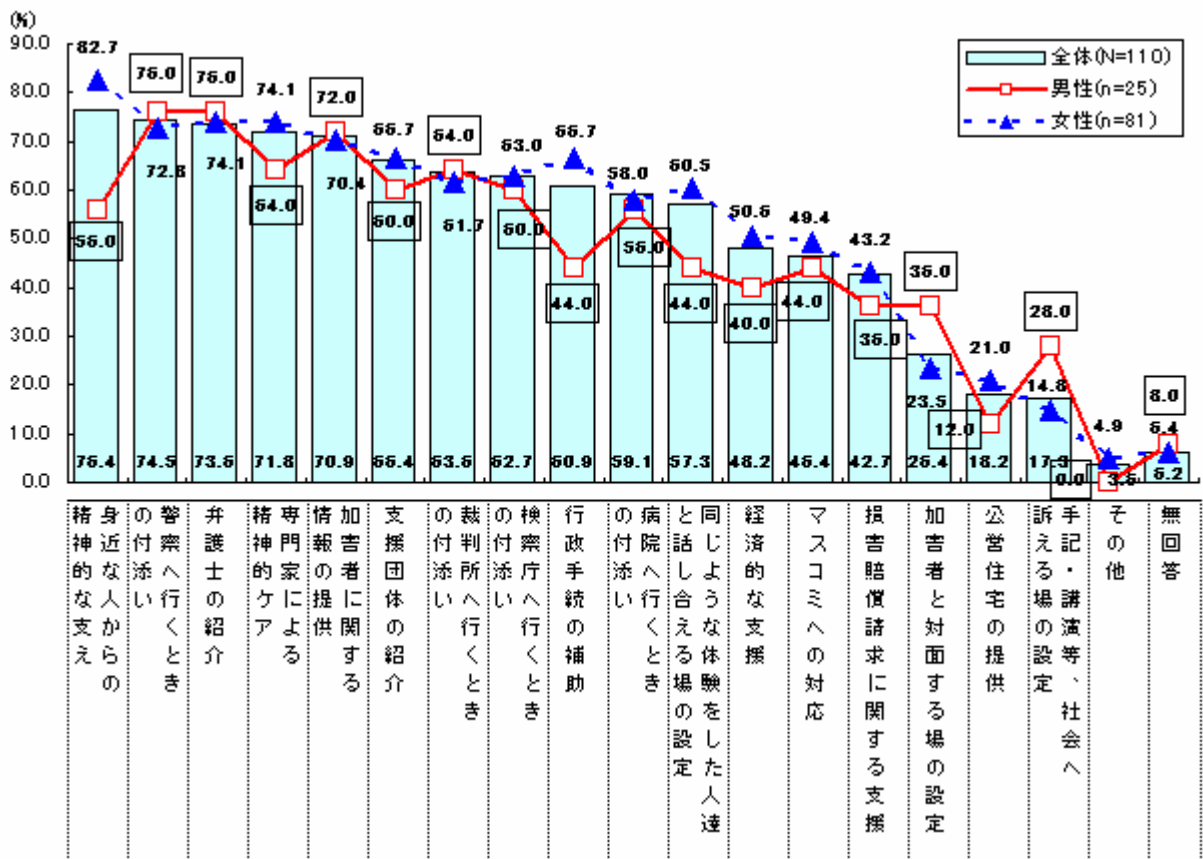
・被害直後に必要な支援

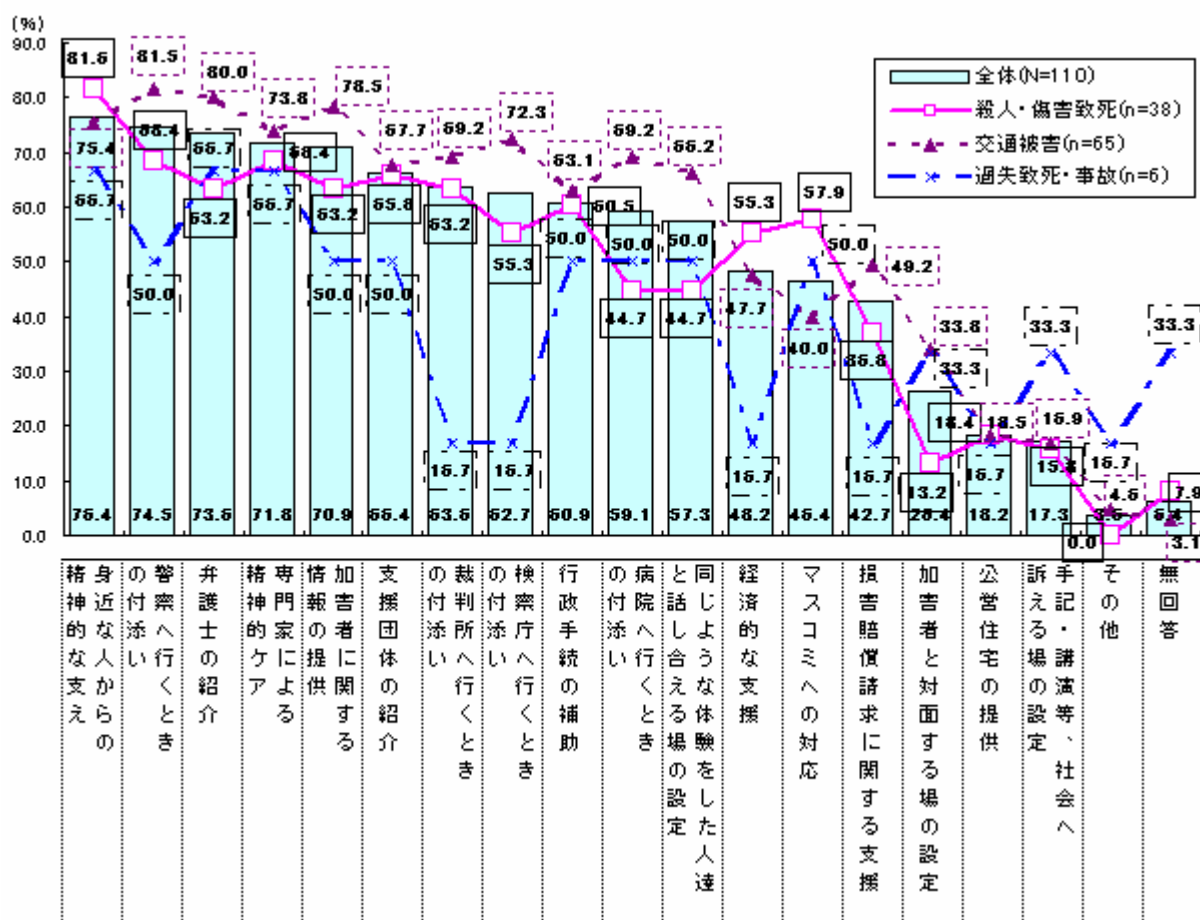
事件直後に求める支援として、18項目中11項目について半数以上の人が必要と答えている。特にその割合が高いものとしては、「身近な人からの精神的な支え」(76.4%)、「警察へ行くときの付添い」(74.5%)、「弁護士の紹介」(73.6%)、「専門家による精神的ケア」(71.8%)、「加害者に関する情報の提供」(70.9%)となっている。

裁判所、検察庁、病院等への付添い支援についても、それぞれ60%前後となっており、要望が多い。「支援団体の紹介」に対する要望も66.4%となっており、専門家を含めた支援者を求める割合も高い。

性別では、女性は「身近な人からの精神的な支え」「専門家による精神的ケア」「行政手続の補助」「経済的な支援」「同じような体験をした人達と話し合える場の設定」で、男性は「社会へ訴える場の設定」「加害者と対面する場の設定」でより要望が多くなっている。

事件別では、「殺人・傷害致死」は、「経済的な支援」「マスコミへの対応」で、「交通被害」は「付添い支援」「弁護士の紹介」「損害賠償に関する支援」「同じような体験をした人達と話し合える場の設定」「加害者に関する情報の提供」「加害者と対面する場の設定」でより要望が多くなっている。





事件直後に必要な支援について、多くの記述があったので下記に列挙する。

- ・最低限でも構わないので、衣食住について安心出来る生活にしてほしいと思いました。
- ・私の場合は事件後1ヶ月仕事を休んだ。当然収入はない。物資両面でのサポートをする行政があればと思う。
- ・事故直後に遺族に替わり警察に対応を行ってくれる「早期支援組織」の制度が必要と感じた。
- ・事故内容の説明、警察、検察、裁判等でどのように進められるか、民事についての説明、各行政手続の指導等、事故直後から支援が必要だと思います。
- ・突然の事故や事件に巻き込まれた時、一番必要なのは今、何をどうしたらよいか方向付けしてくれる機関であり、同時に精神的に支えてくれる人と場であると思う。
- ・事件直後から事件に関する助言が出来る専門家をつけてもらいたい。
- ・支援団体や弁護士、被害者団体の紹介をしてほしかったです。自分で調べて見つけたのは事件後1年でした。
- ・最初に辛い立場になるのが病院です。愛する家族の死と直面し、目の前が真っ白に。何がなんだか分からない状態になっている時に支援者がそばにいてくれると心強い。
- ・事件直後からメンタルな部分での支援をしてほしかった。
- ・事件後は特に愛する人をなくした人間への精神的サポートが必要です。